

1 5 胚移植技術を活用した県産和牛増産への新たな取組

秩父高原牧場

○杉山 公一・矢野 寛・亀田 光澄

当場では、全国的な繁殖雌牛減少による素牛不足を背景に、県内産の和牛生産性向上を目的とした「埼玉の肉牛を守り・育てる生産構造転換事業」(以下、新事業)を平成 26 年度から開始したので、その概要を報告する。

新事業は、県内酪農家から預託された乳用育成牛(以下、受託牛)に対し、当場繋養の和牛から採胚した体内胚を 1 卵移植(以下、ET)し、下牧後生まれた子牛を 3~5 日齢で買い上げ、9 か月齢まで育成したのちに県内の肉用牛及び乳肉複合農家へ譲渡を行う事業である。

平成 26 年度は、育成牛舎及び胚処理施設を整備し、受託牛に ET を行った。また平成 27 年度からは、生まれた子牛の買取及び育成を始めた。

買取後の子牛の飼養管理は、約 90 日間の人工哺乳を行い、離乳後は濃厚飼料の定量給与と乾草(オーツ及びチモシー)の不断給餌を行った。

また、衛生対策では、買取後の着地検査及び隔離牛房での単頭飼育を行い、下痢・呼吸器病対策として駆虫薬及びワクチンを用いた投薬プログラム等を実行し疾病予防に努めた。

受託牛の受胎率は平成 27 年度で 52.3%(57/109 頭)、平成 28 年度は 11 月現在で 58.2%(32/55 頭)であり、そのうち流産率はそれぞれ 7.0%(4/57 頭)及び 12.5%(4/32 頭)、死産率はそれぞれ 12.0%(6/50 頭)及び 10.0%(3/30 頭)となった。また買取時の平均体重は雌が 32.9kg、雄が 36.4kg であり、買取時から譲渡月までの平均日増体重は、雌が 759 ± 72.3 g/日、雄が 879 ± 69.3 g/日であった。

譲渡頭数は、新事業開始により従来の平均 17.6 頭(過去 5 か年)から、平成 27 年度は 31 頭、平成 28 年度中は 54 頭(見込み)と増加し、県内農家への更なる供給拡大を見込んでいる。

今後も胚移植技術、飼養衛生管理の向上を図り、県産和牛の増産と安定供給体制が構築できるよう努めていきたい。